

令和 6 年 6 月 8 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00605

研究課題名（和文）自然言語の階層構造の変異可能性に関する研究

研究課題名（英文）A study on the variability of hierarchical structures in natural language

研究代表者

岸本 秀樹 (Kishimoto, Hideki)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：10234220

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、複雑述語構文、二次述語構文、例外的格標示構文などの述語や項の構造関係について研究を行い、その主な研究成果としての著作は、言語学の分野では評価の高いドイツのDe Gruyter Mouton社から出版されたPolarity-Sensitive Expressions: Comparisons between Japanese and Other Languagesや国際雑誌のJournal of East Asian Linguistics (Springer Nature)や国内の学術雑誌などに含まれている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
複雑述語構文、二次述語構文、例外的格標示構文などの解析を通じて、述語の階層構造及び項の階層関係を解明する研究を行った。本課題の研究期間の間に、国際的な学術雑誌を含むいくつかの国際出版や国内での論文集、学術雑誌での論文出版をすることができ、国内外に対して言語理論・文法理論について新たな提言をする学術的な発信をすることができた。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I conducted research on the complex predicate construction, secondary predicate construction, the exceptional case-marking construction. The major research outputs are included in Polarity Expressions: Comparisons between Japanese and Other Languages (published by De Gruyter Mouton) and the Journal of East Asian Linguistics (Springer), domestic academic journals, etc.

研究分野：統語論、語彙意味論

キーワード：改装構造 変異可能性 述語 項

1. 研究開始当初の背景

言語学では、自然言語（人間言語）にどのような特性・性質が備わっているかを解明することが大きな研究目標の一つとなる。自然言語の特徴として、どのような思考内容でも伝達できるということがあげられるが、言語を用いてこのようなことができるのは、自然言語の精緻なメカニズムによるところが大きい。しかし、自然言語の文法（メカニズム）の根幹については、いまだに解明されていない部分が非常に多い。生成文法やその他の文法理論においては、自然言語に共通の普遍的な文法メカニズム（普遍文法）があると仮定し、文法には言語間で変わらない普遍的な部分と変異が可能な部分があり、それらがどのような性質を持つかを究明することが本研究の主な目標である。

2. 研究の目的

本研究課題では、個別言語の特徴および通言語的に観察される言語現象を考慮に入れ、自然言語の階層構造とその変異の可能性についての研究を行う。特に、日本語を中心に他言語と対照しながら、いくつかの構文の詳細な検討を通じて、言語の階層構造の変異の可能性に関して記述的・実証的な検討を行い、文法理論に貢献できる新たな経験的なデータを提供する。さまざまな言語で検証に使われるデータは特定の理論に依存している場合も多いが、理論が変わると適用できなくなる基準が用いられているものもある。また、近年の理論研究では、これまで何度も議論されてきた言語現象を極めて限定的にしか取り扱わない傾向が強い。これに対して、本研究では、既存のデータだけでなく、これまであまり深く検討されていなかった言語現象も詳細に検討し、述語や項などの文要素の構造関係について新たなデータを掘り起こして、単純に仮定されてきた一般化が正しいのかどうかを検証する。さらに、言語の一般化（構造的な特性）を明示的な形で提示し、普遍性のある理論体系の開発を行なう。国外で開発されている理論を単に当てはめるのではなく、独自の視点から研究を行い、理論的な貢献が可能な研究結果を得ることを目指す。特に、比較検証が可能な形で研究を行い、国際的に進められている研究に対して発信のできる新たな視点からの提言を行い、現在の言語理論へ貢献を考える。

3. 研究の方法

自然言語の階層構造の研究を進める上で、言語の普遍性と個別言語の差異を考慮に入れながら、いくつかの特徴的な性質を持つ構文を詳細に分析する研究方法は、有用な結果を得ることが期待できる接近法であると考えられる。本研究では、二つの個別課題を設定して研究を進めた。

1) 述語の階層構造：世界の言語が類型論的にいくつかのタイプに分類されることは周知の事実である。日本語（およびいくつかのアジアの言語）は膠着言語のタイプに入る。膠着の現象は、とりわけ日本語の述語において顕著に観察され、「複雑述語」と呼ばれる述語が日本語に存在する理由の一つであると考えられている。複雑述語にはいくつかのタイプがあるが、一つの節に複数の動詞が並置される複合動詞が典型的な例である。階層構造について理論的な考察をする際にしばしば生ずる問題は、個別言語の特徴を考慮に入れず、理論のベースとなっている英語の構造を当てはめて分析を進めることが多いことである。英語とは異なり、日本語では統語構造と形態が一致すると考えられる場合もあれば一致しない場合もある。言語の典型的な特徴を考慮した上で、述

語に対してどのような階層構造が許されるかについて詳細に検討する必要がある。述語の階層性の課題については、日本語を含めたいくつかの言語において述語に対してどのような構造が可能であるかを検証した上で、述語の階層構造についての理論構築・モデル化を行い、現在の文法理論に対して提言を行った。

2) 項の階層関係：見かけ上は、項の格標示のみが異なり、一見すると同じような構造を形成するように見える構文が自然言語には多く存在する。その中には、他言語と共通の特性を持ちながらも日本語に特有の特徴が観察される例外的格標示構文や、アジアの言語を含め日本語以外の言語ではあまり観察されていない「主格-属格の交替」がある。例外的格標示構文においては、主語の対格標示がどのようにして可能になるかや、対格主語の構造位置が通常の主格主語と同じかどうかということが問題となる。また、主格-属格の交替についても、どのような構造を持つことによって格標示の交替が可能になるかという問題が出てくる。そのような構文については、いずれの場合も、これまで行われていたよりも階層構造に対するより精緻な検証が必要となる。このような構文の項の階層関係について、本個別課題では、言語の類型的な特徴を考慮に入れ、新たなデータの発掘および分析・理論構築を行った。

4. 研究成果

初年度は、特に、学会については、オンライン参加を余儀なくされ、意見交換による情報集が十分にできなかった面は否めないが、それでも、海外の研究発表については、オンラインとなったThe 53rd Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea SLE 2020において、日本語複合動詞の外部修飾の可能性についての発表を行った。The Secondary Predication Workshop 2020においては、中国語複合動詞の意味と統語についての共同研究を行うことができた。Secondary Predication Workshop 2020の発表内容は、会議録の論文として今年度末に公表された。

2年目も、学会にはオンライン参加を余儀なくされ、海外の研究発表については、オンラインとなったThe 54th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaeaにおいて、軽動詞構文における述語として機能する軽動詞と名詞の役割についての研究発表を行うことができた。The International Workshop on Secondary Predication 2021では、日本語の2次叙述要素の統語構造についての発表を招待講演として行った。The International Workshop on Secondary Predication 2021では講演内容に関する論文が含まれている。この論文については、非規範的な格標示をもつ主語に関する考察をした論文が国際雑誌に掲載された。それ以外にも、統語と意味のインターフェイスについて書いたインターフェイス入門書での論文の出版ができた。

3年目に関しては、前半は、コロナ禍が完全に収束しない中、移動が制限されて、学会には再びオンライン参加を余儀なくされた。しかし、本年度の後半には、移動の自由が徐々にできるようになり、対面の講演会で研究発表をいくつかおこなうことができた。その中には、神戸大学でおこなわれたオックスフォードとの共同コロキウムでの疑問詞疑問文の階層性の発表、イギリスオックスフォード大学での講演会における疑問文に関する研究発表、およびエジンバラ大学でのセミナーにおける二次叙述に関する研究発表が含まれる。論文については、日本語の項省略と助詞の修飾に関する論文（共著）を国際学術雑誌のJournal of East Asian Linguisticsに出版することができた。さらに、肥筑方言のノ格主語に関する考察をした論文（共著）を『言語研究』に出版することができ、標準日本語と肥筑方言のノ格主語に関する比較をした論文が開拓社

より出版された論文集に収録された。書籍に関しては、日本語の文法研究の論文を集めた「日本語文法研究II」を中国の外語教学与研究出版社より出版することができた。

最終年度には、最終的な研究結果の公表に向けて作業を行った。成果としては、対面の講演会での研究発表をいくつか行うことができたことが挙げられる。その中には、ハンガリーのデブレツェンの国際学会での複合動詞構文の意味的制約に関する発表、フランスパリのINALCO及びイギリスオックスフォード大学でのレクチャーにおける軽動詞構文に関する研究発表、フランスパリのINALCOでの脱使役化動詞のレクチャーが含まれる。その他、国内においても、北海道大学での軽動詞構文の発表、南山大学の語論・意味論・言語獲得論ワークショップの日本語統語構造の構成に関する発表、神戸大学のLinguistic Symposiumにおける心理副詞の分析の研究発表など、かなり活発に活動することができた。論文については、軽動詞構文の一種である「青い目をしている」構文に関する新たな視点からの分析をした論文を発表、また、複雑述語形成に関わる隣接性の条件に関してDM理論に基づく分析をした論文が開拓社より出版された論文集に収録された。書籍に関しては、共編のPolarity-Sensitive Expressions: Comparisons between Japanese and Other LanguagesがドイツのDe Gruyter Mouton社から出版され、極性表現と統語構造を扱った論文が収録された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 13件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 岸本秀樹	4. 巻 1
2. 論文標題 「複雑述語の縮約現象：形態構造と隣接性条件」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『分散形態論の新展開』	6. 最初と最後の頁 30-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Osamu Sawada, Hideki Kishimoto, and Ikumi Imani 1	4. 巻 1
2. 論文標題 “Empirical and theoretical issues of polarity-sensitive expressions.”	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Polarity-Sensitive Expressions: Comparisons between Japanese and Other Languages	6. 最初と最後の頁 3-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hideki Kishimoto	4. 巻 1
2. 論文標題 “Negative polarity and clause structure in Japanese.”	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Polarity-Sensitive Expressions: Comparisons between Japanese and Other Languages	6. 最初と最後の頁 313-381
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hideki Kishimoto and Kazushige Moriyama	4. 巻 31
2. 論文標題 “Adverbial particle modification and argument ellipsis and in Japanese.”	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of East Asian Linguistics	6. 最初と最後の頁 1-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山倭成・岸本秀樹・木戸康人	4. 巻 161
2. 論文標題 肥筑方言におけるノ格主語の主語移動」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『言語研究』	6. 最初と最後の頁 35-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本秀樹.	4. 巻 4
2. 論文標題 「コミュニケーションの視点から見た構文の統語・意味・文脈情報の相互作用-日本語「見つかる」の分析-」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers	6. 最初と最後の頁 171-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本秀樹, 森山倭成	4. 巻 3
2. 論文標題 「標準日本語と肥筑方言におけるノ格主語の構造位置について」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小川芳樹(編)『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』	6. 最初と最後の頁 242-258
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本秀樹	4. 巻 1
2. 論文標題 「補助動詞構文のV2における文法化：脱範疇化と融合」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岸本秀樹(編)『レキシコン研究の現代的課題』	6. 最初と最後の頁 135-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hideki Kishimoto	4. 巻 1
2. 論文標題 "Dative case and three-place predicates in Japanese."	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Robert D. Van Valin Jr. (ed.) Challenges in the Analysis of the Syntax-Semantics-Pragmatics Interface: A Role and Reference Grammar Perspective	6. 最初と最後の頁 91-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hideki Kishimoto	4. 巻 30
2. 論文標題 "ECM subjects in Japanese."	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of East Asian Linguistics	6. 最初と最後の頁 231-276
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本秀樹	4. 巻 1
2. 論文標題 「統語論と形態論のインターフェイス」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中村浩一郎 (編) 『統語論と他の分野とのインターフェイス』	6. 最初と最後の頁 45-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hideki Kishimoto	4. 巻 1
2. 論文標題 "The syntactic forms of secondary predicates: A view from Japanese."	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Masashi Kawashima, Hideki Kishimoto, and Kazushige Moriyama (eds.) Papers from the International Workshop on Secondary Predication 2021	6. 最初と最後の頁 42-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本秀樹	4. 巻 1
2. 論文標題 「例外的格付与構文」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 村杉恵子・高橋大厚・瀧田健介・高橋真彦（編）『日本語研究から生成文法理論へ』	6. 最初と最後の頁 250-265
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hideki Kishimoto	4. 巻 68
2. 論文標題 “On the position of ECM subjects: A case study from Japanese.”	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Linguistica Brunensia	6. 最初と最後の頁 7-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 岸本秀樹	4. 巻 1
2. 論文標題 「生成文法と言語類型論」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 窪園晴夫・野田尚史・ブラシャント パルデシ・松本曜（編）『日本語と言語類型論』	6. 最初と最後の頁 235-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本秀樹	4. 巻 1
2. 論文標題 「日本語ECM構文の主語移動と移動のタイプ」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岡部玲子・八島純・窪田悠介・磯野達也（編）『言語研究の楽しさと楽しみ 伊藤たかね先生退職記念論文集』	6. 最初と最後の頁 254-263
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Hideki Kishimoto
2. 発表標題 “(Anti-)maximalization in Japanese V-V compounds.”
3. 学会等名 International Workshop on Maximalization Strategies in the Event Domain (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岸本秀樹
2. 発表標題 「疑問詞問文における文の階層性について」
3. 学会等名 『日本語研究の最前線3』 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hideki Kishimoto
2. 発表標題 “Hierarchical effects of wh-questioning in Japanese.”
3. 学会等名 Oxford Kobe Linguistics Symposium (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hideki Kishimoto
2. 発表標題 “On the formation of secondary predicates in Japanese.”
3. 学会等名 Meaning and Grammar Seminar
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiideki Kishimoto
2. 発表標題 “ The roles of verbs and nouns in Japanese light verb constructions. ”
3. 学会等名 The 54th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea SLE 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hiideki Kishimoto
2. 発表標題 “ Japanese verbs of tying and binding: Alternations and coercion. ”
3. 学会等名 The 16th International Conference on Role and Reference Grammar 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hiideki Kishimoto
2. 発表標題 “ The syntactic forms of secondary predicates: A view from Japanese. ”
3. 学会等名 The International Workshop on Secondary Predication 2021 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岸本秀樹
2. 発表標題 「 「青い目をしている」 構文の意味と統語構造について 」
3. 学会等名 日本語文法学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hideki Kishimoto
2. 発表標題 “ V-V compounds and adjunct modification in Japanese. ”
3. 学会等名 The 53rd Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea SLE 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yile Yu and Hideki Kishimoto
2. 発表標題 “ Variations of Chinese resultative verb compounds and their syntax and semantics. ”
3. 学会等名 The Secondary Predication Workshop 2020 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 岸本秀樹・臼杵岳・于一楽	4. 発行年 2023年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 352
3. 書名 『構文形式と語彙情報』	

1. 著者名 岸本秀樹 (編集幹事) 木戸康人・眞野美穂・三浦香織・森下裕三・森山倭成 永富央章・中島浩貴・臼杵岳・依田悠介・于一楽	4. 発行年 2023年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 320
3. 書名 『英文法用語大辞典シリーズ 第1巻 文』	

1. 著者名 Hideki Kishimoto, Osamu Sawada, and Ikumi Imani	4. 発行年 2023年
2. 出版社 De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 457
3. 書名 Polarity-Sensitive Expressions: Comparisons Between Japanese and Other Languages	

1. 著者名 岸本秀樹・于康	4. 発行年 2022年
2. 出版社 外語教学与研究出版社	5. 総ページ数 533
3. 書名 『日語語法研究(下)(日本語の文法研究II)』	

1. 著者名 岸本秀樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 教養検定会議	5. 総ページ数 248
3. 書名 日本語のふしぎ発見！ 日常のことに隠された秘密	

1. 著者名 Hideki Kishimoto	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------